中学校における特別支援教育コーディネーターと担任等との連携
―情報整理と情報共有のための「相談シート」の活用を通して―

新宮市立城南中学校
教諭　久　安　孝　典

【要旨】
特別支援教育においては，気になる生徒の支援についてニーズを適切に把握し，様々な情報や方針を共有することが基本的な条件として求められている。しかし所属学年や教科の違いにより，所属校では特別支援教育コーディネーター（以下，特支 CO と略記）が担任等と気になる生徒について話し合う機会が少なく,支援につながりにくかった。そこで，本研究では，担任等と特支 CO が相談を通して連携を図る相談シートを作成し，所属校において活用を試みた。相談シートは，相談の入り口として必要最低限の内容に簡略化し，実用的なものを目指した。また，相談シートの中に取組に流れについて見通しをもてるよう工夫した。今後は，校内支援体制に相談シートの活用を位置づけていくために，年度当初の「相談シートの活用の流れ」についての周知を確実に行うとともに，特支 CO から担任等への積極的な働きかけに取り組んでいくことが考えられる。

【キーワード】
特別支援教育コーディネーター　連携　情報整理　情報共有　相談シート

１　研究のねらい

平成 19 年度の学校教育法改正に伴い,各校では特別支援教育推進の中心的役割を果たす特別支援教育コーディネーターの指名がなされた。

筆者は，所属校において平成 23 年度から特支 CO として校内支援体制の構築に取り組んできた。所属校では特別支援教育の目標を,「一人一人の生徒を大切にし,その教育的ニーズを適切に把握する。日常生活において必要な支援を行い，その個性と能力を伸ばし，生徒の自立を図る。」としている。この目標達成のため，各学年で気になる生徒を挙げ，担任を中心にチェックリストへ記入し，個別の指導計画の作成に取り組んでいる。しかし，これまで特支 CO が担任等と連携して支援に取り組むことが十分ではなかった。それは気になる生徒について話をする機会があっても，話の観点が不明確なためその場限りで終わってしまい，今後の支援へとつながるような有効な時間にすることが十分ではなかったからではないかと考えられる。

研究に際し,特支 CO の役割について特別支援教育コーディネーター実践ガイド(2006)をもとにふり返りを行ったところ,「校内外の関係者から情報を集め，支援のための知恵や力を引き出すこと」（※１）を再認識した。このことから，特支 CO と担任等が話をするときには，論点を明確にして，実態把握や個々の生徒に応じた支援のあり方等を整理していくことが必要ではないかと考えた。また，石隈（2003）は,「援助者が，子どもについての情報や援助の方針を共有することが大切」（※２）と述べ，複数の関係者で支援に取り組むことの必要性を指摘している。そこで，収集された様々な情報を整理して校内全体で共有し，生徒への支援に取り組むことが重要であると考えた。以上の点から，情報整理のための話し合いの論点を明確にし，記録として残すことで後の情報共有につなげられるようなシートの作成と活用に着目した。

本研究では，相談シートの作成と活用を通して特支 CO と担任等との連携を深めること

を目的とする。所属校において現在の特支 CO をはじめ全職員の協力のもと，相談シートの活用のあり方や特支 CO の取組について，実践・考察をしていく。

２　研究の内容

（１）相談シートの作成

「石隈・田村式援助シート」（2003）等の先行研究を参考に，**図１**に示す相談シートを作成した。次の①～④の項目ごとに概要を述べる。

①気づきの記入…相談者または特支 CO が，気になる生徒の行動や課題，指導上の悩み等を記入する。書くことで課題を明確にすることを目指した。気づいたことのみを記入することで，相談者の書くことへの負担感を軽減するよう留意した。

②気づきについての情報収集…相談者の負担感を軽減するため，20 分間という時間設定で相談を行う。相談に際し特支 CO は，相談者の話を傾聴することに留意しながら情報を収集する。その際，話が逸脱せず，多角的に情報を収集できるよう，事実や背景要因，相談者の思いを聞き取り，記入する欄を設定した。

③今後に向けて…特支 CO が，今後の取組や活用できる校内資源等について見通しをもてるような項目を立てた。相談内容に応じて，行動観察の視点や校内外の人的資源の活用等について可能な範囲で記入できるよう留意した。

④相談後の取組…特支 CO が相談後に得た情報や支援の方策等を記入することで学年会や職員会議で情報の共有を図ることができるよう留意した。最後にふり返りの欄を設け，生徒の変容や今後の支援についてまとめるようにする。

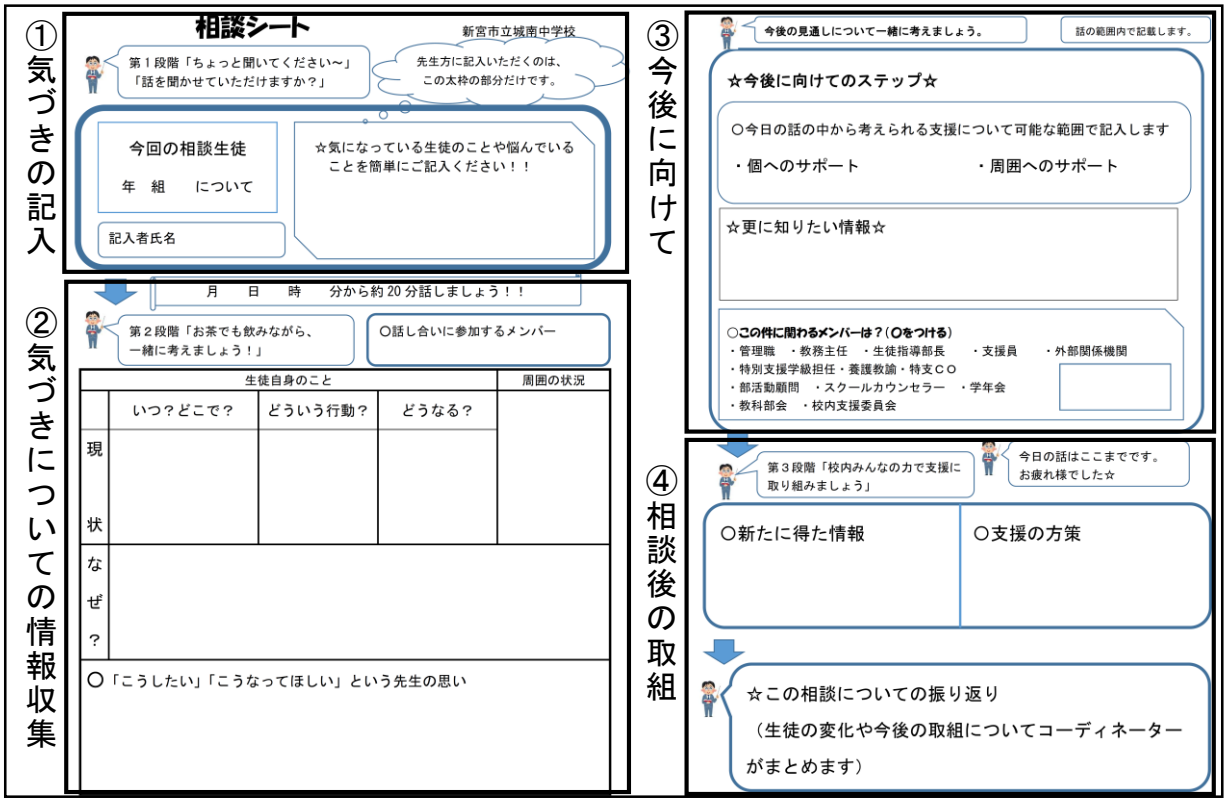

図１　作成した相談シート

（２）相談シートの活用

図２は，基本的な相談シートの活用の流れを示したものである。本研究では，情報整理を「生徒の情報を共有するために整理すること」とする。そして，情報共有を「今後の支援につなげるために会議等で情報を共有すること」とする。以下，ア～エに活用の流れについて詳細を述べる。

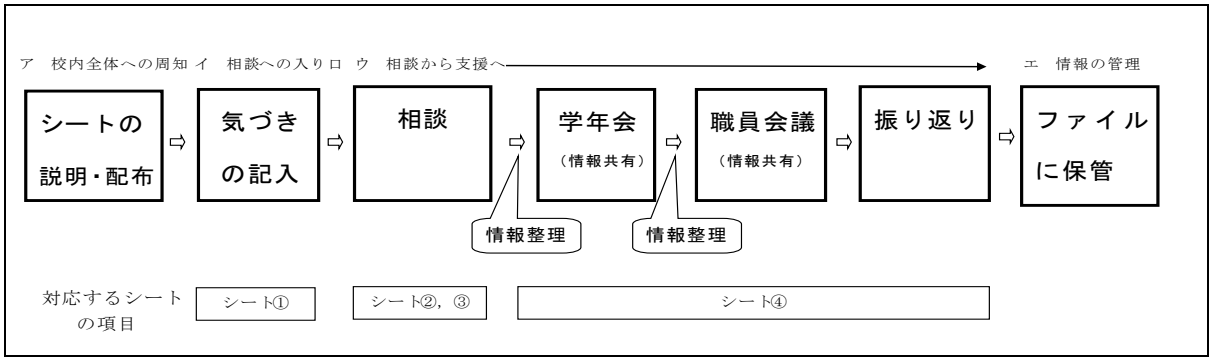

図２　相談シートの活用の流れ

ア　校内全体への周知

特支 CO は，職員会議において相談シートについて説明し，配布する。その際，「特支 CO と一緒に話をして考えましょう」と声をかけ，相談シートの使用を提案する。

イ　相談への入り口

職員室の特支 CO の机付近に相談シートの入ったファイルを用意する。担任等は，話をしたいときにいつでも記入し，特支 CO に渡せるようにする。

ウ　相談から支援へ

担任等から相談があった場合，まず相談日時を設定する。相談時間は 20 分間とする。相談後は，校内外の資源を活用した連携を中心として取り組む。

エ　情報の管理

集まった相談シートは，特支 CO がファイルに閉じて保管する。年度末にファイルの整理を行い，実践記録として校内で閲覧できるようにする。このようにして，記録をすることで支援の履歴として残り，今後個別の指導計画の作成時期や校内委員会等において適宜参考資料として活用できるようにする。

３　所属校における実践

（１）概要

ア　実践期間と観察の視点

・実践期間　　平成 27 年 10 月 1 日～11 月 30 日

・主な観察の視点　　相談者との連携に関する特支 CO の取組の経過

イ　聞き取り調査

・対象　　特支 CO，相談者（担任等），管理職

・聞き取りの内容　　相談シートに関する感想や連携のあり方について

（２）相談シートの活用事例

実践期間中，計５件の相談があった。各事例の概要は以下の通りである。また，各事例の経過について**表１**に示す。

・事例 A…特支 CO が相談者に，気になる生徒について話をしたいと声をかけて相談が行われた。内容は生徒の授業中の行動に関することであった。相談シートをもとに背景要因について話を進めるうちに，特支 CO も気づかなかった生徒の一面が明らかになり，課題を共有することができた。特支 CO は，後日，実態把握のための行動観察を行った。そして，学年会において相談シートのコピーを資料として活用し，学年所属の他の教員から情報を収集した。その学年会の協議の中でスクールカウンセラー（以下，SC と略記）との連携についても協議され，特支 CO は相談シートを資料にして SC と相談をした。その後，SC による行動観察につながり，連携して取り組むことができた。特支 CO は，これらの情報を整理し，職員会議で情報共有した。その結果，生徒に対して統一した対応が取られるようになった。

・事例 B…特支 CO と相談者の雑談から相談に至った事例である。相談後，特支 CO が相談シートに記入した。内容は，学習面の課題に関することであった。特支 CO は，

特別支援学校の巡回相談の日程調整をした。その後,巡回相談での助言等の情報を整理し，職員会議で情報共有した。相談者は、巡回相談による助言により，生徒の課題に応じた教材提示などの工夫をした。職員会議による情報共有後，各教科担当教員が生徒 B の課題に応じた関わりを意識した。その結果，生徒 B の表情が穏やかになり，授業中自ら支援を求めたりする場面も見られるようになってきた。

・事例 C・D…相談者が気づきを記入し，特支 CO が相談シートを受け取り，相談の日程調整が行われた。２枚の相談シートに，複数の生徒に共通する授業中の行動や学習面の課題が記入されていたため事例 C･D とする。相談当日，相談者の悩みが語られ，特支 CO は傾聴することに重点を置いて対応した。相談の中では，情報整理まで至らなかったため，今後も支援を継続していくこととなった。

・事例 E…相談者からの「自分が気になっている生徒について第三者的な立場から観察して，気づいたことを教えてほしい」という行動観察の依頼を受け，話し合いの日程調整が行われた。後日，行動観察と相談が実施され，生徒 E の学力面と行動面に関する協議が行われた。相談により，生徒のつまずきが整理され，相談者は自身の授業改善に向けて前向きに取り組むことにつながった事例である。

表１　相談事例の経過

	情報整理と情報共有に関する経過						
A	10月8日 相談による情報収集	10月9日 行動観察	11月9日 学年会(情報共有)	11月10日 SCとの連携	1月19日 情報整理	11月25日 職員会議(情報共有)	継続支援
B	10月14日 雑談の中で相談	10月15日 シート記入	10月16日 巡回相談	11月19日 情報整理	11月25日 職員会議(情報共有)		
C D	11月6日 相談日程調整	11月13日 相談による情報収集	11月19日 情報交換(筆者と特支CO)				
E	11月6日 行動観察の依頼	11月10日 相談による情報収集	11月19日 情報交換(筆者と特支CO)				

（３）聞き取り調査

事例 A～E の相談者に，相談シートを活用した相談について感想を尋ねた。その結果，「今後すべきことが分かった」,「生徒のことについて整理できた」などの意見が多かった。一方,「シートに書くとなると負担感を感じる」という意見もあった。特支 CO と管理職には，相談シートの活用の仕方と連携について尋ねた。その結果，相談シートをきっかけにして特支 CO が担任等に働きかけていくことの必要性等が指摘された。

（４）所属校実践の振り返り

特支 CO は相談者の話を傾聴しながら，相談シートの項目に沿って情報を収集した。相談内容は，全て授業場面の行動や学力面に関するものであった。相談後の情報整理には，内容・学年・相談時期等による違いが見られた。相談シートの活用としては，学年会および SC との会議の資料として用いた。

４　成果と課題

（１）研究の成果

相談シートの活用を通して得られた成果について，ア～ウの３点に整理して述べる。

ア　相談シートによる情報収集に関する成果

相談者からの「話をしていくことで生徒の課題が分かった」という意見より，相談シートに沿って多角的に聞き取ることで，気づきに関する背景要因の推定に至ることが示された。特支 CO にとっても，自分が担当する教科以外での生徒の姿を知るきっかけになる。事例 A の相談中特支 CO は,「(自分の担当教科と）違う教科の時にはそんなことがあるのだと気づいた」と話をしている。相談後の聞き取りでは,「自分の担当教科とは異なる生徒

の一面を知ることができ，話をしてよかったと思う」と答えており，相談シートを活用して話をすることにより，教員間で多様な視点を共有できることが示された。

イ　校内外の資源との連携に関する成果

事例 B や事例 E の相談者からは，相談を通して「授業づくりの工夫をしていきたい」という意見が得られた。事例 B では，特支 CO による教材づくりの一例の提案や特別支援学校の巡回相談により，相談者自身に心理的な余裕が生まれ，その後生徒 B の特性に応じた学習課題を提示するなど，無理に全体に合わせることをしなくてもよいという考えを持つに至った。事例 E では，相談者が自分の言葉で生徒について語るうちに考えを整理することができた。生徒 E の課題だけでなく，よいところや授業中できているところについての話し合いも行われた。聞き取り調査における「話を聞いてもらうだけで 7 割ぐらい解決したような気がする」という相談者からの意見から，相談を通して「頑張ろう」という前向きな気持ちになれたことがうかがえる。また，特支 CO は事例 A において，「今後に見通しをもつことができ SC との連携に活用できた」と答えており，幅広い校内資源の活用につながることが示された。

ウ　「相談シートの活用の流れ」の設定による成果

事例 A では，学年会によって検討された取組の実際が職員会議において共有された。その結果，全教員が生徒の特性について共有し，対応をそろえることにつながった。

また,「支援の経過も分かり, 引継ぎにも使える」,「相談後, 何をすればよいか分かった」という管理職や特支 CO の意見から，今後異動等による特支 CO の変更があった場合でも同じように相談に活用し，支援に継続的に取り組む手立てになることが分かった。

（２）今後の課題

相談シートの活用に関する課題について，ア～エの 4 点に整理して述べる。

ア　校内教員への周知について

校内全体への周知の際，具体的な「相談シートの活用の流れ」を特支 CO 以外の教員に伝達できていなかった。そのため，管理職から「教員には見通しが持てないと活用につながらないのでは」という意見が得られた。今後は，全職員に活用の流れを周知していくことが必要である。

イ　相談の入り口に関する課題

聞き取り調査では，若手教員から「先生方が忙しそうなので相談したくても話しかけづらい」といった回答が得られた。相談者からは,「シート記入に負担感を感じる」という意見もあり，管理職からは「待ちの姿勢ではなく，特支 CO の側から声かけをする必要がある」という指摘もなされた。特支 CO として校内の状況に配慮し，困っている教員にも気づくことが，必要であると考える。

ウ　相談シートの様式について

相談シートの様式や使い勝手に関する課題も見出された。時間設定については，20 分間では相談シート「②気づきについての情報収集」「③今後に向けて」までの項目を全て話すことは難しいという意見が出された。記入欄の大きさについては,「実際に書くとなると狭く感じた」という意見もあった。また，実際の相談場面では，課題だけでなく生徒の長所に着目して実態を把握するような聞き取りも行われていた。長所について記入する欄を設定することも支援を検討していく上で重要であると考える。以上の点から，時間設定や記入欄の大きさ，聞き取り項目の追加等相談シートの様式についても，今後所属校教員の意見等を取り入れながら修正を加えていきたい。

エ　特支 CO の所属学年の枠を越えた取組について

特支 CO が所属する学年以外の相談について，日程調整や行動観察の設定に困難さがあることが示された。特支 CO からは,「学年会が同じ日に設定されることもあり，両方には参加できない」,「他の学年には声をかけづらい」といった指摘がなされた。特支 CO の所属学年の枠を越えて，情報整理と情報共有を円滑に進めていくことに関する課題が残された。聞き取り調査の中で特支 CO も,「特支 CO がすべて一人で取り組むのではなく，役割

分担しながら各学年で声をかけて相談シートに記入してもらうことも大事ではないか」と答えている。今後は，校内委員会等の場において，気になる生徒に関する情報収集を担当する役割を各学年の担当者が担い，特支 CO が集約して支援につなげるなど今ある校内資源の中で講じられる取組について検討していくことが課題となる。

（３）特支ＣＯと担任等との連携について

相談事例をふり返ると，担任等には気になる生徒に対して，様々な気づきがあり，「何とかしたい」という思いを抱いているということがうかがえた。

その上で，連携に取り組んでいくには，担任等が気になる生徒への支援についての悩みを一人で抱え込むことのないよう，日常のコミュニケーションが重要になると考える。事例 B のように雑談から相談に発展することもあるため，日常の何気ない会話を大切にしていきたい。また，相談を通して担任等が生徒への支援に主体的に取り組めるようサポートしていくことも重要である。

５　今後に向けて

今後所属校において，校内支援体制の中に相談シートの活用を位置づけていくには，特支 CO から担任等への積極的な働きかけが必要であると考える。まずは，年度当初に「相談シートの活用の流れ」を分かりやすく校内に周知する。具体的には，校内研修や校内特別支援便りの活用等が考えられる。また，校内の様子や個々の教員の気づきを把握し，無理のない範囲で特支 CO から相談を働きかけていくような取組についても検討する。

本研究を通して，多様な情報を収集し共有するには担任等との日常のコミュニケーションが大事であることが明らかになった。更に，必要に応じて短時間でできる簡易なケース会議を設定することも考えられる。生活面の課題については生徒指導部，学習面については授業研究部というように既存の校内資源との連携の際，資料として相談シートを活用することについても検討していく。

生徒一人一人の学校生活が充実し，自立を図ることができるよう，校内全体で統一した対応ができるような体制を浸透させていくことを大切にしていきたい。

＜引用文献＞

※１　国立特殊教育総合研究所（2006）「特別支援教育コーディネーター実践ガイド」
http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/kankoubutsu/pub_c/c-59.htm/

※２　石隈利紀・田村節子（2003）「石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門」図書文化

＜参考文献＞

・神奈川県立総合教育センター「はじめようケース会議Ｑ＆Ａ」（2010）
http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/kankoubutu/h20/pdf/case_m.pdf

・近藤志伸他「高等学校における特別支援教育の実践に関する研究」愛知県総合教育センター研究紀要 第 101 集（2011）

・福岡市発達教育センター「ケース会議マニュアル」（2013）
http://www.fuku-c.ed.jp/center/contents/tokushi/case_manual.pdf

・宮木秀雄・木舩憲幸「特別支援教育コーディネーターが通常の学級担任に対して行う支援の内容に関する研究」広島大学大学院教育学研究科紀要　第一部　第 59 号（2010）

・文部科学省「小・中学校における LD，ADHD，高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）」（2004）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1298152.htm